

二、三四郎のおどろき

三四郎は、上京する列車の中で広田先生と出会う。広田先生は、高校で英語を教え続ける一介の教師に過ぎないが、社会を見る目は冷徹である。広田先生は、三四郎とのやり取りの中で、日露戦争（明治三十七〜三十八年）後の日本を「いくら日露戦争に勝って、一等国になってもだめですね。尤も建物をみても、庭園を見てもいづれも顔相応の所だが」と切り捨て三四郎の「然し是からは日本も段々と発展するでせう。」という発言に対し、「亡びるね。」と言う。この言葉を聞いた時、三四郎は、熊本でこんなことを口にしたせば、悪くすると国賊扱いされると驚く。広田先生はさらに「熊本より東京は広い。東京より日本は広い。日本より」と「日本より頭の中の方が広いでせう。「囚はれちゃ駄目だ。いくら日本の為と思つたつて鼻肩の引き倒しなる許だ」と若い三四郎を諭す。日露戦争の戦勝に沸く中、「日本は亡びると予言する広田先生の冷徹な目は、英国留学をし、西欧文明の底力を知らされた漱石の目に他ならない。英国で漱石を追い詰めたものの正体は、西欧文明の奥深さではなかったのか。日清戦争に勝利し、欧米列強に追いつくことを国是とした当時の日本と英国の文明の奥行きに絶

望したのではなかったのか。そして「囚はれちゃ駄目だ。」と言う言葉には、自らの苦い経験すら作品に昇華する漱石のたくましさ、柔軟さが顕われている。そこには、物事を多面的に見ることのできる複眼的な思考がある。日露戦争後、わずか三十七年後に日本は太平洋戦争に敗れるのであるから、広田先生の予言は正しい。こういう文明批評は、当時全盛の自然主義作家にはないもので、自ら「低廻派」と称した漱石の一面目躍如たる所である。日露戦争は、日本の勝利に終わるが、国民が期待した賠償金は得られず、増税と戦後インフレに苦しめられた。人々の不満は、時の政府に向けられ、各地で暴動が起きたが、中でも日比谷暴動は政府を震撼させ、後の「大逆事件」へ向かう契機となる。そして日露戦争は、乃木希典という英雄を生むことになる。

三、世代の相違

『三四郎』では、與次郎が「丸行燈だの、雁首だのつて云うものが、どうも嫌ひですがね。明治十五年以後に生れた所為かも知れないが、何だか旧式で厭な心持ちがする。君はどうだ」と三四郎に語りかける場面がある。三四郎、與次郎と広田先生の年の差を言うわけだが、恐らく明治初年の生まれである広田先生は、旧式の人である。だから家に出

入りする里見美禰子に対し、「あの女は落ち付いて居て、乱暴だ」、「あの女は心が乱暴だ。尤も乱暴と云つても、普通の乱暴とは意味が違ふが。」という感想を持つ。全否定するわけではないが、理解しがいがあるのであろう。元來、漱石は、漢籍を学び、南画を愛したように漢学の教養を身につけた人で、いわば江戸の教養人である。そういう人が、政府の命令で英国に留学し、西欧の文明と対峙したのである。明治二十年代に学生時代をおくった広田先生と明治四十年頃に学生時代をおくる三四郎、與次郎とは、その教養、感性に大きな差があるようだ。

四、明治の終焉

同じ図式は、大正三年に朝日新聞に連載した『ころ』にも言えることである。先生は、明治二十年代に学生時代をおくるから、広田先生と同世代である。先生は、明治天皇の崩御に時代の終焉を感じ、乃木大将の殉死に理解を不す。終章に「私は新聞で乃木大将の書き残して行つたものを読みました。西南戦争の時、敵に旗を奪られて以来、申し訳のために死のうと思つて、ついに今日まで生きていたという意味の句を見た時、私は思わず指折つて、乃木さんが死ぬ覚悟をしながら生きながら来て来た年月を勘定してみました。西南戦争は明治十年ですから明治四十五年までには

三十五年の距離があります。乃木さんはこの三十五年間死のう死のうと思つて、死ぬ機会を待つていたらしいのです。」とあり、漱石にとつて明治天皇の崩御、乃木大将の殉死は大きな出来事だった。漱石に私淑した、志賀直哉は、明治十六年生まれで、三四郎、與次郎たちと同じ世代だが、乃木大将に冷淡で、その殉死を聞いて、「乃木さんが自殺したということ聞いた時、『馬鹿な奴だ』という気が、丁度女かなにかが無考えに何かした時感ずる心持と同じような感じ方で感じられた」と日記に記している。志賀直哉よりさらに九歳年下の芥川龍之介は『將軍』の中で、「むろん俗人じゃなかつたでしょう。至誠の人だった事も想像できません。唯その至誠が僕等には、どうもはつきりのみこめないのです。僕等より後の人間には、尚更通じるとは思われません」と乃木大将を語っている。広田先生は、明治の終焉、乃木大将の殉死をどう受け止めたであろう。恐らく、先生の受け止め方に近いのではないか。なぜなら明治十五年以前に生まれた旧式の人で、同じ教養、感性を共有しているはずだから。

《参考文献》

- 『大正時代を訪ねてみた』 皿木喜久 産経新聞社
『二葉亭四迷の明治四十一年』 関川夏央 文春文庫
『白樺たちの大正』 関川夏央 文藝春秋